

私が学生だったとき、寒い冬の朝、下宿の部屋の布団は温かかった。

内科のポリクリに遅刻した。焦って担当の先生の研究室に着くとポリクリ仲間の6人の学生は来ていなかった。

先生は不機嫌であった。「まだ誰もきておらん。1時間前から待っていた。私がどれだけ我慢していたか分かるか」と、お説教が始まった。先生は自分の言葉に触発されて怒りが重層的に高まっていった。「キミねー、私を誰だと思っているんだ！」私はその先生の名前を知らなかった。

「私の時給はいくらか知ってる？」私は思わず「いくらですか？」と聞いた。

「余分なことを聞くな！」と1時間も待たされた先生は怒りが更に激しくなった。

怒りがピークに達した頃、二人目が到着した。先生は、私に話したことを最初から繰り返した。その二人目も「いくらですか？」と聞いた。私たちは先生の時給に興味があった。私たちの時給はその頃、中日球場でボール拾いをやって300円であった。

そこへ3人目が到着した。3人目は、部屋で何が起こっていたのか知らなかった。だから私たち二人の不安そうな表情を見て「どうしたの？」と聞いた。

先生が「あのねー」と言って私たちの置かれている状況を説明するために、私と二人目に話したことを繰り返さなければならなかった。3人目には時給のことは言わなかった。また「いくらですか？」と聞かれたくなかったのだ。

そして4人目がきた。その頃になると先生は怒るのに疲

れてしまっていた。4人目からはトーンが下がって、5人目は叱られなかった。6人目は来なかった。

あの頃でもポリクリでは、出席を取っていた。出席票に、担当の先生が印鑑を押した。外科のポリクリで、私は出席票を持参するのを忘れたので後日、先生に印鑑を押してもらいに行った。

先生は私が出席していない日にも印鑑を押してくれた。そして休日にも印鑑を押してしまった。「先生この日は日曜日です」というと先生は指でこすってその日の朱印を消した。出席票が赤く染まった。

30数年前のポリクリであった。

最近ではどこの大学でも出席日数が不足すると、試験が受けられなくなった。

その代わりに学生が教官を評価するようになった。小学生の通知票のように5段階評価が多いようだ。

小学生の通知票には先生から父兄への感想を書く欄がある。大学の授業アンケートにも自由記載の欄がある。

「給料ドロボー」と書かれた教授が怒っていた。

学生は言いたかったのだ。

「あのですねー、先生の講義に、私たちはどれだけ我慢しているか知っていますか？」

